

# 学生の主体的な学びを促進する授業マネジメントに向けて－普通教室で行うアクティブラーニング

岩野 雅子

山口県立大学国際文化学研究所

## Fostering the Responsibility in Learning: Towards Active Learning Classrooms

Masako IWANO

Graduate School of Intercultural Studies

主体的な学び（アクティブラーニング）の促進について、筆者が担当する共通教育科目「国際理解」において実践してきた授業改善の取り組みについて報告し、大人数を対象とする普通教室の授業マネジメントのあり方について検討する。本取り組みは、平成25年度東北大学履修証明プログラム「大学教育人材育成プログラム」（平成25年8月～平成27年3月）に参加し、国内及びカナダでの研修で得た知見をふまえた実践である。本学が平成24年度に採択された文部科学省グローバル人材育成推進事業（現在は、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）で行っているアクティブラーニングスタジオでの授業マネジメントを視野にいれつつも、より多くの教員や学生がアクティブラーニングを使えるように、普通教室で行う大人数を対象とした講義形式の授業での実践例を報告する。本報告を通して、大学全体として学生の学びの質の転換を促す必要性を強調するものである。

Fostering responsibility in learning is the key for changing attitudes of both students and teachers. In this study, a class for liberal arts delivered to a large audience is the focus, and the discussion centers on how to make the class active. The researcher joined the EMLP (Educational Management and Leadership Program) for Higher Education Innovation at Tohoku University from August 2013 to March 2015, where successful models for active learning in Japan and Canada were introduced. While the researcher is currently involved in classroom management of an active learning studio specifically designed with various ICT tools in a so-called 'future school' style, other classes which utilize classical facilities and styles of classroom management must be considered. These latter courses are challenging, as the class size tends to be large; considering how to make a large class active is important in order to change the quality of learning in learners as a whole at the university level.

キーワード：主体的な学び、授業マネジメント、学びの成果の評価

Keywords: Active Learning, Classroom Management, Assessment on Learning

### 1. 主体的な学びの促進について

文部科学省「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（平成24年8月）により、教育の質的転換が求められた。「主体的な学び」「能動的な学び」あるいは「Active Learning（アクティブラーニング）」「Student Engagement」といった言葉が登場し、読む、書く、議論する、発表する、実施する、フィードバックを得て学びの成果を振り返り省察するといったプロセスを通して、学生の「学修」が深い学びの知恵のレベルまで落とし

込まれていく<sup>1)</sup>。教師の役割は、そういう学生自身の主体的な学びを支援することに重点がおかれる。

山口県立大学では第二期中期計画（平成24年度～平成29年度）において、教員が何を教えるのではなく、学生がどのような力を身につけるのかに着目した学士課程の体系化を進めている。国際文化学部ではさらに経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（平成24年度から平成28年度、以下グローバル事業と称す）の採択を受け、アクティブラーニングに力を入れている。さらには、平成32年から実施される新学習指導要領改訂に向けて初等

中等教育におけるアクティブラーニングが議論の一つとして取り上げられ、文部科学大臣より中央教育審議会での検討が諮問されたとも報じられている<sup>2)</sup>。主体的な学びは、小学生から大学生まで、そして、その後も生涯続く学びへの姿勢として、今後定着していきそうである。

主体的な学びの促進には、ICTを活用した教育の推進が不可欠である。近年のグローバル化、情報化、少子化等に対応するため、文部科学省は平成23年に教育の情報化の推進にあたっての基本的な方針として「教育の情報化ビジョン」を公表し、学びのイノベーション事業が展開されてきた。平成26年6月に閣議決定された「第二期教育振興基本計画」においては、平成29年度までに初等・中等教育で達成されるべき項目を定め、ICTを活用した教育環境の整備が進められている。本学の第二期中期計画が終了する平成29年度は、小中高校におけるICTを活用した教育推進の目標達成年度と重なっている。今後は、小中高校教育においてデジタルネイティブとして育ち、ICTを活用した主体的な学習体験の豊富な若者が大学に入ってくる時代となる。このような状況を受け、小中高校はもとより、各大学においてアクティブラーニングに特別なスタジオが整備されてきており、児童、生徒、学生等がタブレット端末を用いて行う授業デモンストレーションに参観者が殺到するというような現象も起きている。

特設のアクティブラーニングスタジオで行う授業に加え、一般的な普通教室においてもアクティブラーニングを促進する授業改善の取り組みも進んでいることが、河合塾が行った全国調査からわかる<sup>3)</sup>。アクティブラーニングとは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」<sup>4)</sup>とされている。したがって、特別なICT機器や特設スタジオを利用しなくても、学生の能動的な学びを促す教授法は可能なのである。1990年頃からアメリカで発展したアクティブラーニングであるが、そもそもの始まりは「Involvement」という概念であり、それは「学生中心の教育」という言葉で日本にも紹介され、学生自身の学びの体験(ExperienceやActivity)が重視されるようになった。アメリカに遅れること20年という日本でのアクティブラーニングの広がりや、まだここ数年の現象である。しかしながら、議論はすでにアクティブ

ラーニングそのものから移行し、「ディープラーニング」(Deep Learning)という言葉で表現されるように、いかに学生の深い学びを促進するかというテーマへと進化を続けている<sup>5)</sup>。

学生の主体的な学びを促進するためには、授業展開の工夫が必要であり、授業マネジメントのスキルが必要になる。特に、本論が取り上げるような100名を超える大教室での講義形式の授業においては、さまざまな工夫を取り入れることになる。ここでは、一般的な大教室でも行えるアクティブラーニングについて、筆者が参加した研修をふまえて、

- 1) LMS (Learning Management System) を活用した授業マネジメントのあり方、
  - 2) ICEモデル<sup>6)</sup>を用いたレポート課題の出し方、
  - 3) ルーブリックを用いたレポート評価のしかた、
- の三つに焦点を当てて授業改善を試みた結果について報告する。同時に、学生の主体的な学びを促進する授業マネジメントに関する本取り組みを通して、学生の学びの質転換を行っていくための教育改革の重要性について論じることとする。

## 2. EMLPプログラムと教育改革の取り組みについて

本論で取り上げる授業改善の取り組みは、平成25年度東北大学履修証明プログラム「大学教育人材育成プログラム」(EMLP: Educational Management and Leadership Program for Higher Education Innovation at Tohoku University、平成25年8月～平成27年3月、以下EMLPと称す)に参加し、国内及びカナダでの研修で得た知見をふまえた実践となっている。「Be an Innovator at Your Institution」をキーワードとするこのプログラムは、「各種セミナー・ワークショップで大学教育の教育・学習活動やマネジメントに関する知識を広く学ぶとともに、各参加者が各所属機関の教育改善・改革の「課題」を持ち寄り、相互に情報交換しながら議論を行うことを通して、改革案を有効で実現可能なものに高め、実際に実施すること、その経験を通して各機関レベルで改善・改革を担えるリーダーへと成長していくこと」を目指す<sup>7)</sup>とされている。

この研修に応募するにあたって当初筆者が提出した取り組み案は、主体的な学びの促進を、本学が採択されたグローバル事業という大きな枠組みの中に位置付け、トップマネジメント主導による上からの教育改革と、科目担当者レベルという下からの教育改革をつなげるクロスポイントを探ろうとするものであった。平成24年度から始まったグローバル事業の副総括(教育担当)として、一年次から四年次までを一貫した主体的な学びの促進と、学びの成果

の蓄積・評価という課題に直面し、大きな教育改革の流れをつくることを考えていた。

しかしながら、五年間というグローバル事業期間の中で学部や全学で推進するアクティブラーニングと、約一年半という期間内にEMLPにおいて個人で取り組むアクティブラーニングとを繋いで考えることは難しく、関係性をふまえつつも、まずは個人レベルの授業改善に取り組んでみる必要があるという助言を得た。その成果をFD等で報告することを繰り返すなかで、科目担当者レベルという下からの教育改革につながる流れを生み出すことに貢献できればというのが本取り組みの企画となった。EMLPのアドバイザーの先生方や他大学からの履修者等からの助言、カナダのクィーンズ大学<sup>8)</sup>での研修等を経て、最終的には「アクティブラーニングを取り入れた授業マネジメントのあり方について検討すること」を主たる目的とするものへ焦点化していった。特に、カナダのクィーンズ大学での研修において、ICEモデル提唱者のスー・ヤング氏から直接話を聞くことができたこと、また、大教室（階段教室）で行われる一般的な講義で用いられているアクティブラーニング（ICT機器は一切用いられなかった）の授業見学ができたことが参考になった。

具体的には、次の三つについて結果を出すことを具体的な目標とした。

- 1) 個人で担当する授業科目において、学生の主体的な学びを促進する授業マネジメントに向けた取り組みを行い、普通教室（大教室）でもアクティブラーニングが実施できることを示す。
- 2) 学生の主体的な学びの成果を評価するしくみをつくり、他の科目にも応用可能なことを示す。
- 3) アクティブラーニングの取り組みについてFD等を通して学内外に広く周知する。

本研究では、主として基礎教養科目である「国際理解」を取り上げた。また、国際文化学部基幹科目である「異文化交流論」においても一部実施を試みた。なお、平成26年度前期に開講した「国際理解」は国際文化学部や社会福祉学部等からの一、二、三年生約90名が履修し、A32教室（階段教室）で授業を行った。「異文化交流論」は国際文化学部一年生を中心とした130名程度が履修しており、階段教室での開講であった。履修者数は例年ほぼ同じ数となっている。また、昨年度（平成25年度）は両科目共に後期開講であった。そのため、EMLP期間内における授業改善の取り組みについては、平成25年度後期及び平成26年度前期と二回にわたって普通教室（大教室）におけるアクティブラーニングの授業を展開し、改善を試みることができた。

先に述べたように、グローバル事業におけるアクティブラーニングが本論の枠外にある。グローバル

事業により、平成25年度後期にはアクティブラーニングスタジオを利用した授業二科目（「域学共創Ⅰ」「域学共創Ⅲ」）に科目担当者として加わり、また平成26年度にも二科目（「域学共創Ⅱ」「域学共創Ⅲ」）において同スタジオを使った科目担当者に加わった。アクティブラーニングスタジオで行う授業と、普通教室で行うアクティブラーニング授業との比較をすることはなかったが、工夫のあり方の相違について考える機会をもつことができたと考えている。

### 3. 授業改善の取り組みについて

先に述べた三つの具体的な目標について授業改善を行ったものについて、取り組み内容と結果について示す。

#### 3-1 個人で担当する授業科目において、学生の主体的な学びを促進する授業マネジメントに向けた取り組みを行い、普通教室（大教室）でもアクティブラーニングが実施できることを示す

EMLPのアドバイザーからの助言により、普通教育（階段教室）で大人数の学生を対象に行う講義形式の授業において、アクティブラーニングを取り入れた授業改善に必要な視点は以下の通り七項目あった。

- ・テキストで授業の骨格を示すこと
- ・学生が授業前にテキストを読まざるを得ないようにすること
- ・学生が授業前にテキストを読んでやってくる小テストの採点を自動化すること
- ・テキストで読んだことや調べてきたこと、授業で学んだことを小レポートで表現させること
- ・小レポートはオンラインで提出できるようにすること
- ・小レポートの課題を出すときに、レポートの評価の観点（ループリック）をあらかじめ示しておき、評価の観点をふまえたレポート作成ができるようにすること
- ・小レポートを返却するときに、ループリックをふまえた評価をつけ、確実にフィードバックを行い、それが次のレポート作成に活かせるようにすること

ここで小レポートというのは短い簡潔なレポートをさしており、15回の授業の途中で、内容の理解度を図ったり、振り返って考えたり、深化させたりするために用いるものをいう。科目の成績評価は、小レポート2回、毎回の小テストの点数、最終試験等で行った。

共通教育科目「国際理解」における授業改善につ



いては、絶版になっているテキストについて出版社から事前の許可を得た上でオンライン化し、LMS (Learning Management System) である本学の「Web カルチャー」上で学生が毎週分を閲覧できるようにした。テキストは国際交流に関する課題を、さまざまな文化的背景をもつ多様な主人公の人生物語として描かれた短い章からなっている。事前学習として、学生には毎回三つ程度の物語を読んでくることを課した。また、毎回テキストに関する小テストを用意し、授業前にテキストを読んでLMS上で回答してくれるように準備した。図1に示したように三つの質問を用意し、複数の選択肢のなかから回答を選択してクリックすると、正解の場合は青、間違いの場合は赤がつくようになっている。このため、学生は回答した瞬間に正否がわかるため、ほとんどの学生が小テストをやってきていた。

また、「異文化交流論」については市販のテキストを購入させ、毎回事前に各章を読んで小テストを受けて授業に臨むようにし、授業の最初の部分で要点を解説するようにした。いずれの科目においても、学生はテキストを読んできているので、授業はできるだけワークショップ、ディスカッション等を取り

入れる形をとった。

「国際理解」の授業では、毎回の授業で読ませる物語について、三人一組のグループごとに分担した章を各5分間で発表する時間を設けた。5分発表して5分質疑やコメントとなり、毎回三グループで30分の発表時間となる。これは、テキストで描かれた物語の背景となる人間関係や社会問題、国際交流や多文化共生に関する課題について掘り下げる時間とした。学生によるグループ発表については、ICEモデルのフォーマットによりA4で一枚のレジユメを作成させた。図2に示したように、事前にLMS上に提出させることにより、全員に配布して要点が共有できるようにした。90名の履修者がいるので、発表をする機会は各グループ一回のみである。なお、ICEモデルについて図2に示した。グループ発表用のレジユメには、図3で示すようにICEの頭文字である「I」「C」「E」という三つの視点から、読んできた章の内容について説明や解釈をさせた。

先にも述べたように、学生は小レポートを二回提出し、最終試験を受ける。二回目のレポートにつ

## 小テストの採点の自動化(発表グループ以外の学生もテキストを読んでいるか確認ができる)

<input type="checkbox"/>	国際文化学部文化創造学科	終了	2014年06月26日 20:50	2014年06月26日 20:53	2分44秒	10.00	✓ 3.33	✓ 3.33	✓ 3.33
<input type="checkbox"/>	国際文化学部国際文化学科	終了	2014年06月26日 20:55	2014年06月26日 20:56	39秒	6.67	✓ 3.33	✓ 3.33	✗ 0.00
<input type="checkbox"/>	国際文化学部文化創造学科	終了	2014年06月26日 21:22	2014年06月26日 21:24	1分46秒	10.00	✓ 3.33	✓ 3.33	✓ 3.33
<input type="checkbox"/>	国際文化学部国際文化学科	終了	2014年06月26日 22:39	2014年07月3日 10:27	6日11時間	6.67	✗ 0.00	✓ 3.33	✓ 3.33
<input type="checkbox"/>	国際文化学部文化創造学科	終了	2014年06月26日 22:50	2014年06月26日 22:53	2分14秒	10.00	✓ 3.33	✓ 3.33	✓ 3.33
<input type="checkbox"/>	国際文化学部文化創造学科	終了	2014年06月26日 23:03	2014年06月26日 23:05	1分27秒	6.67	✓ 3.33	✓ 3.33	✗ 0.00
<input type="checkbox"/>	国際文化学部文化創造学科	終了	2014年06月26日 23:05	2014年06月26日 23:06	22秒	10.00	✓ 3.33	✓ 3.33	✓ 3.33
<input type="checkbox"/>	国際文化学部文化創造学科	終了	2014年06月27日 09:40	2014年06月27日 09:42	2分28秒	10.00	✓ 3.33	✓ 3.33	✓ 3.33
<input type="checkbox"/>	国際文化学部文化創造学科	終了	2014年06月27日 11:12	2014年06月27日 11:14	1分45秒	10.00	✓ 3.33	✓ 3.33	✓ 3.33
<input type="checkbox"/>	国際文化学部文化創造学科	終了	2014年06月27日 11:40	2014年06月27日 11:59	18分30秒	10.00	✓ 3.33	✓ 3.33	✓ 3.33

図1：小テストのオンライン化 (LMS「Webカルチャー」の画面より)

### トピック 5

5月16日(金):テキストの発表が始まります。発表は以下の通りです。発表時間は1グループ5分です。原稿を読み上げるのではなく、工夫をしてください。通常、人は1分で350字~400字話すとされています。5分では2000字(原稿用紙5枚分)。工夫をすれば、5分のなかにたくさん情報を入れることができます。

5月16日:1,2,4、5月23日:5,6,7、5月30日:8,11,12、6月6日:14,15,16、6月13日:17,19,20、6月20日:25,26,27、6月27日:31,32,33、7月4日:35,36,37、7月11日:38,40,41、7月18日:42,47,49

 発表グループのレジュメ提出先:各グループ発表は、まずこのフォーマットを使って発表資料を作成し、発表日の前々日(水曜日)の夜までに提出すること。こちらで印刷します。

 3分間で効果的にプレゼン(例) CIEE国際キャンプから

### トピック 6

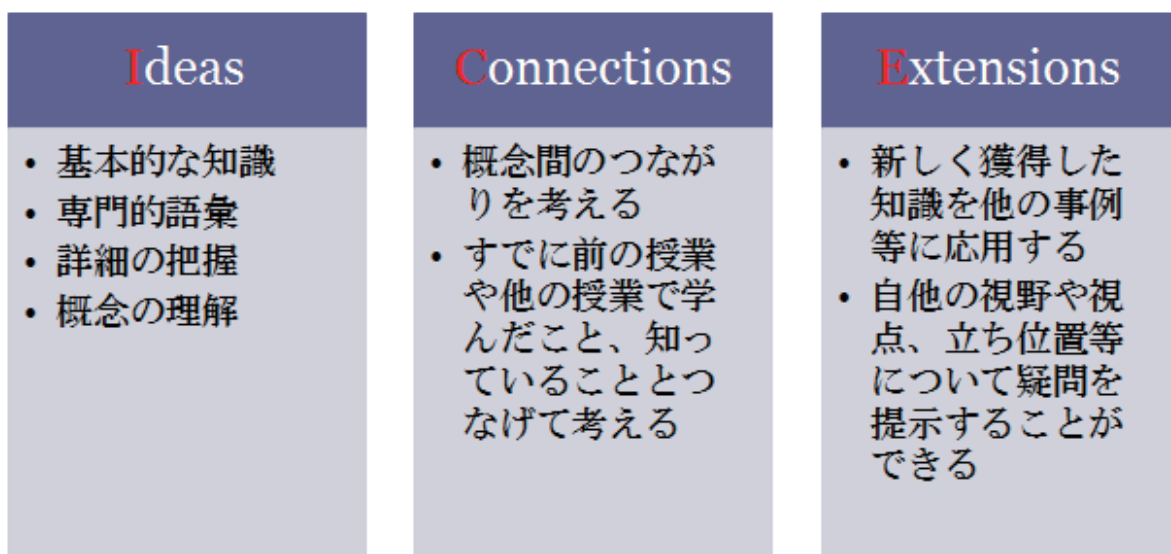
レポート①の提出:イベントに参加したのち、2週間以内。なお、8月7日(木)に参加する場合は、最終締め切りは8月11日(月)となります。提出するファイル名は、イベントの日時と氏名を書いてください。(例:6月8日、岩野)。Webからチャージ上に提出してください。

 レポート①のICEモデル フォーマット

 レポート①の提出:国際理解の講座に参加して

図2:LMS上での事前学習、レポート提出窓口(「Webからチャージ」の画面より)

## ICEモデル



Assessment & Learning: the ICE Approach (2000) Sue Fostaty Young and Robert J Wilson. (『主体的学び』につなげる評価と学習方法-カナダで実践されるICEモデル』土持ゲーリー法一&小野恵子訳、東信堂、2013年をもとに筆者作成)

図3 ICEモデル

いてはテキストをすべて読み終えた時期に設定し、ICEモデルのフォーマットにそって、テキスト全体への理解度を深める機会とした。小レポート課題を出す際に、レポート評価用のループリックを事前に配布し、ループリックにそって評価することを伝えておいた。ループリックの例を図4に示す。教員は小レポートを読み、ループリックの該当箇所には○をつけた上で合計点を書いて返却することになる。従来は90名程度のレポート採点をするために数日程度かかっていたが、ループリックを用いることで、わずか数時間で見終えることができた。さらに、従来は採点の途中で何度も休憩をとり、その都度ベースをもどしたり、評価基準のバラつきを修正するのに苦労していたが、ループリックに沿った採点をすればこれらが解消される上、比較的早い時期に返却できるので、フィードバックを得た学生の感触は良かったように感じた。

### 3-2 学生の主体的な学びの成果を評価するしくみをつくり、他の科目にも応用可能なことを示す

これについては、先にも述べたとおり、ループリックを用いたレポート評価が効果的であるという

感触を得ることができた。ループリックを事前に配布することで、学生は明確な目的と指標をもってレポート作成に取り掛かれるようになる。また、レポート返却時には評価された意味が理解でき、振り返りもできる。「国際理解」「異文化交流論」の二科目について、それぞれ15回の授業のなかで二回の小レポート課題を出したが、一回目については前期の前半であり、ループリックの準備が間に合わなかった。前期終了前に出した二回目のレポートでは、ループリックを用いることができた。ステューブンス&レビ(2014)の書籍タイトル『Introduction to Rubrics: an assessment tool to save grading time, convey effective feedback, and promote students learning』が示す通り<sup>10)</sup>、ループリックを用いると、「成績評価の時間を短縮することができ、効果的なフィードバックをすることがために、学生がよかった点や改善点について知った上で、次回はもっとがんばってみようという学びを促進する」ことにつながると考える。

また、上記のステューブンス&レビによると、ループリックを用いた評価は、講義だけでなく臨地実習にも有効である。グループに分かれて地域に出て学習活動を行う場合や、実習の受け入れ先がある場合

#### 国際理解

##### レポート課題(15点満点)

項目	模範的 3	合格 2	要改善 1	不合格ライン 0
課題の把握	課題に沿った文脈や読者や目的を十分によく理解し、文章作成のための全ての要素によく注意を払っている。	文脈や読者や目的についてある程度理解し、課題に対して十分によく理解している。	課題に沿った文脈や読者や目的があるということを漠然とだけ意識しているが、不十分である。	文脈や読者や目的や課題に殆ど注意を払っていない。
Idea	理解していることを論理的に伝え、適切で関連性があり説得力のある内容を展開している。	適切で関連性があり説得力のある内容を展開している。	ある程度適切で関連性のある内容を展開しているが、論理性や説得力にやや欠ける。	思いや感情表現にとどまり、論理的で説得力のある内容が展開できていない。
Connection	理解していることを論理的に伝え、適切で関連性があり説得力のある内容を展開している。	適切で関連性があり説得力のある内容を展開している。	ある程度適切で関連性のある内容を展開しているが、論理性や説得力にやや欠ける。	思いや感情表現にとどまり、論理的で説得力のある内容が展開できていない。
Expantion	理解していることを論理的に伝え、適切で関連性があり説得力のある内容を展開している。	適切で関連性があり説得力のある内容を展開している。	ある程度適切で関連性のある内容を展開しているが、論理性や説得力にやや欠ける。	思いや感情表現にとどまり、論理的で説得力のある内容が展開できていない。
参考文献等	参考文献等を参照したという十分な証拠(エビデンス)が明確に示している。	参考文献を参照したという証拠(エビデンス)が書かれている。	参考文献を参照したことが予測できる記述となっている。	参考文献を参照したことが全く読み取れない。

図4：レポート評価のためのループリック例  
(ステューブンス&レビ『大学教員のためのループリック評価入門』  
玉川大学出版部 2014年<sup>9)</sup>を参考に、筆者作成)

など、グループ間や担当教員間、受け入れ団体間で共通した評価指標を示すことができるため、公平性も保てる。また、受け入れ団体に評価の一部を依頼する場合、文章でコメントを書いてもらうよりも、比較的簡単に評価を得ることができる上、評価基準は大学が示したものであるため、相手側に評価する行為に対するプレッシャーをかける度合いが低くなる。本取り組みで得られた結果をふまえ、来年度に向けて六名の教員がチームティーチングで行う隣地実習科目で用いるルーブリックに応用することを検討している。

さらに、ルーブリックを用いた評価は、研究室に分かれて行う卒論研究等の評価にも用いることができると考え、学科会議に提案をしたところである。四年生の新年度オリエンテーション時に、「卒業論文・卒業報告・卒業制作要領」とともに評価用のルーブリックをあらかじめ渡しておくことにより、研究室に分かれても、同一の基準で評価をする一助になる。卒業研究については、途中のプロセスや、中間発表会・最終発表会等のプレゼンテーションやピアレビューなど、評価指標はほかにもある。しかし、あらかじめ一定の統一基準を示すことは、何を求められているかを学生自身が知った上で卒業研究に取り組めるといふ動機づけの点で、効果を発揮すると予想している。チームを組む同僚教員とルーブリックを作成したり、学科で議論を共有したりすることはFDにもなる。

もう一歩進めるならば、スティーブンス&レビがいうように、学生やTAを巻き込んで、レポート評価に関するルーブリックを学生たち自身につくらせることから始めれば、学生は何を学び、何を評価されるべきかを考えてから授業にのぞむことになり、主体的な学びはさらに深まる。これは平成27年度の授業で取り組みたいと考えている。

### 3-3 アクティブラーニングの取り組みについてFD等を通して学内外に広く周知する

これについては、平成25年度に本学において開催された参加型FDにおいて、取り組みの経過を紹介した。

・「アクティブラーニングを学ぼう」（平成26年12月4日、山口県立大学アクティブラーニングスタジオ「Y-ACT」にて開催。）

また、平成26年度のFDにおいても本論で述べた内容について報告した。

・「アクティブラーニングに関するFD」（平成27年2月26日、山口県立大学アクティブラーニングスタジオ「Y-ACT」にて開催。）

LMSを使った授業マネジメントについては、他の教員に依頼し、以下のFDを開催した。

・「学生の主体的な学びにつなげる - Web ちゃーを使いこなそう!」（平成26年9月18日、山口県立大学アクティブラーニングスタジオ「Y-ACT」にて開催。）

なお、アクティブラーニングについての学外での報告については今後の課題である。

### 3-4. 今後の課題

「15回の授業である種のまとまりや体系性を持たせるようにし、その骨格をテキストで示すという学習戦略」を明確にしていくというはある程度実現できたと考えるが、「グループによるロールプレイやシミュレーションの結果も何らかの形でまとめさせ、それを評価してコメントをつけて戻すこと」、「関係するテキストをきちんと読み、グループで問題を討論する習慣を定着させること」という発展的な学習活動に至るには、さらなる改善が必要である。平成26年度の本学におけるFD「授業デザイン・ワークショップ」（平成27年2月20日、山口県立大学アクティブラーニングスタジオ「Y-ACT」にて開催）に参加することで、15回全体の構造について再度みなおし、次年度の第一回目の授業において、学生が自分の学びの発展や深化のしかたがイメージできるようにしたい。

100人を越すクラスを一人の教員が担当する場合は、ティーチングアシスタント（以下、TAと称す）の活用も課題である。EMLPのカナダのクィーンズ大学研修では、TAの研修に参加した。MAやPhD生をTAとして育成し、クラスに入って学部生を支援できるようにするための研修である。大学院生数に限りがある本学の場合は、四年生をジュニアTAとして活用する制度が待たれるところである。グローバル事業では、学生サポーター制度を導入しており、SLA（Students Learning Advisor）といった様々な工夫をしている大学もある<sup>11)</sup>。本学のTA制度は基本的に実習科目にのみTAを活用することができる規定となっているが、100名を超えるクラスにおいてアクティブラーニングを行う場合、TAあるいはジュニアTAを活用できるようにするとともに、研修の仕組みを整備する必要がある。

アクティブラーニングを導入すると、90分では講義時間が足りないため、反転授業についても考える必要がある。反転授業については、ただ単に講義を収録し、事前に見てから授業に来るといふのでは効果がないことが報告されている。大手学習塾による有名講師の授業配信でさえ、生徒が開始ボタンを押したまま机の前で眠ってしまい、何度も見直しを迫られるといった状況もあることから、能動的・主体的に「見てもらう」ための工夫が必要になる。予



告編的な内容を10分程度見させて小テストをやらせたり、学習記録をコンセプトマップでまとめたり、ポートフォリオに蓄積したりといった事例は参考になる<sup>12)</sup>。あるいは、60分などの長い収録講義を見せる場合はノートをとらせ、TAにそのノートを確認するなどの事例も活用できる<sup>13)</sup>。最初は半強制的な方法を用いて学修習慣を身につけさせ、おもしろそうという動機づけに代わり、さらには、やると得をしたという感覚（反対に言えば、やらないと損をするという感覚）にまでもっていくことが必要である。反転授業の導入は、主体的な深い学びを促進するために不可欠であると思われる。

上記で述べてきたように、今回の試みと反省点をふまえ、平成27年度用のシラバスに反映させることで、個人的な授業改善のPDCAサイクルを回していくことができる。また、個人レベルの授業改善について継続的に学内FDで報告することや、チームティーチングの会議で提案する、学科会議で提案するなどを通して、科目担当者レベルという下からの教育改革の流れをつくることができると考える。

#### 4. 取り組みの評価とこれからについて

ここまで、学生の主体的な学びを促進する授業マネジメントに向けて、普通教室で行うアクティブラーニングを取り入れた授業改善の取り組みについて報告してきた。本論で報告した授業改善の取り組みについては、以下の事柄をもとに評価することができると思う。

- 1) 学生の授業評価
- 2) 学生のアクティブラーニングに関するアンケート
- 3) アクティブラーニングに関するFDのアンケート
- 4) 学生のポートフォリオ、コンセプトマップの分析
- 5) 成績評価を終えた後に学生へのインタビュー

今後は、授業改善を平成27年度の授業運営に活かし、上記のデータを収集した上で、いくつかの報告書(関西大学:2010年、愛媛大学共通教育センター:2012年、有本:2014等)<sup>14)</sup>を参考にまとめていきたいと考えている。この間、同時にグローバル事業で行っているアクティブラーニングに関する評価や報告書についても副総括(教育担当)としてまとめてきたところである。本論で述べたような試みから得た知見を活かし、学生の主体的な学びを促進する授業マネジメントについて、一科目の枠を超えて教育改革の流れにつながるよう、評価と報告を行いたい。

主体的な学びの促進について考えると、アクティブラーニングはただ一つの手法にすぎない。「主体的な学修をするのは学生本人であって、大学の役割はその学修を支え、促進することにある。」「学生の人生はその学生のものだから、彼や彼女が主体性を

もって学ぶのは当たり前のことである。その当たり前のおおざなりにされていたのが日本の大学であった。これを転換するのは容易ではないが、今年になって転換への一歩が記されようとしている。』(安西:2012、p9-10)<sup>15)</sup>。二年前に書かれたこの言葉から考えても、本学は早い一歩を踏み出したといえよう。高校生から社会人へ、子どもから大人へと移行する大切な四年間に教養と専門性と社会性を身につけさせ、生涯にわたる学びの旅に立たせる責任は重い。教育改革への様々な試みは、大学教員という自分自身の長いキャリアのなかで、大学の教員であるということの意味を問い直す機会を与えてくれると考える。

#### 注

- 1) 土屋ゲーリー法「中教審答申と主体的な学びがどう授業改善につながるか－教育ITソリューションXPO－」『主体的学び 特集 パラダイム転換「教育から学習へ、ICT活用へ」』創刊号2014年 pp.109-119
- 2) 朝日新聞デジタル、2014年12月4日付 <http://www.asahi.com/articles/DA3S11488575.html>、教育新聞、2014年12月4日付 <http://www.kyobun.co.jp/opinion/20141204.html> [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2012/10/04/1325048_3.pdf)
- 3) 河合塾『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか：経済系・工学系の全国調査からみえてきたこと』東信堂(2011年)、河合塾『「深い学び」につながるアクティブラーニング－全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂(2013年)。
- 4) 「アクティブ・ラーニング」文部科学省用語集より [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2012/10/04/1325048_3.pdf)
- 5) 溝上慎一「大人数講義における知をふまえたアクティブラーニング型授業(ピアインストラクション)の開発」河合塾・RIASEC主催PROGセミナー配布資料による。2012年7月14日開催。[http://www.kawai-juku.ac.jp/prog/event/pdf/2012progosa\\_4.pdf#search=%E6%BA%9D%E4%B8%8A+%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%8B%E3%83%B3%E3%82%B0](http://www.kawai-juku.ac.jp/prog/event/pdf/2012progosa_4.pdf#search=%E6%BA%9D%E4%B8%8A+%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%8B%E3%83%B3%E3%82%B0)、溝上慎一「アクティブラーニングの変遷と今後の在り方」CHieru. Web Magazine 2014年9月14日付。<http://www.chieru-magazine.net/magazine/2014>



- high-magazine/entry-3851.html
- 6) ヤング・F&ウィルソン・R著、土持ゲーリー法一監訳 『「主体的な学び」につなげる評価と学習方法 - カナダで実践されるICEモデル』 東信堂 (2013年)。アマゾンの書評によると、「今日わが国の教育は、教師の教を自動的に受け入れ模倣する「浅い学び(真似び)」が中心である。「深い学び」に導くために、本書は、学校で教える基礎知識(Ideas)の間のつながり(Connections)を適切な質問と指導を通して理解させ、さらに自らの体験に結びつけた知の応用(Extensions)へ発展させる、「主体的学び」のための絶好の指導・実例集である」とされている。
- 7) 大学教育人材育成プログラム配布資料(東北大学)による。プログラム概要については [http://www.he.tohoku.ac.jp/CPD/files/201305211200279787\\_1.pdf](http://www.he.tohoku.ac.jp/CPD/files/201305211200279787_1.pdf) 参照。
- 8) CTL:Centre for Teaching and Learning, Queens University, Canada. <http://queensu.ca/>
- 9) Stevens, D. D. and Levi, J. A. 'Introduction to Rubrics: an assessment tool to save grading time, convey effective feedback, and promote students learning.' 佐藤浩章監訳 『大学教員のためのルーブリック評価入門』 玉川出版部 2014年。
- 10) 前出。書籍の副題が、学修効果を表現している。
- 11) 邑本俊亮 『大学の授業を運営するために - 認知心理学者からの提案 - Classroom Management at University and College』 東北大学高等教育開発推進センター ブックレット Vo. 2 2012年 pp78-79.
- 12) 土持ゲーリー法一 「反転授業はアクティブラーニングを加速するか」『主体的学び特集 反転授業がすべてを解決するのか』 2号 2014年11月、pp24-43.
- 13) 渡辺博芳 「主体的な学びを支援するメディアサイト活用例」 2014年11月28日 事例報告の配布資料より。
- 14) 文部科学省大学間連携共同教育推進事業「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築研究成果報告書(中間)」2014年4月 有本章編 くらしき作陽大学・作陽音楽大学 [http://www.ksu.ac.jp/research\\_center/docs/2014managementsystem\\_half.pdf](http://www.ksu.ac.jp/research_center/docs/2014managementsystem_half.pdf)、「アクティブラーニング実施例 創生授業実施報告書からの抜粋」愛媛大学共通教育センター 2012年 <http://web.iec.ehime-u.ac.jp/jugyoantoroku/jisshirei.pdf>、「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」関西大学 2010年 [http://www.kansai-u.ac.jp/algp/H21GP\\_Report.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/algp/H21GP_Report.pdf) 等。
- 15) 安西祐一郎「主体的に学ぶ - 21世紀日本を支える教育の理念と実践 -」『IDE 現代の高等教育 主体的な学習』No.543 2012年8-9月号 pp5-10.
- \*注で使用したURLについては、いずれも2014年12月17日最終アクセスを行った。
- 本論を執筆するにあたり、東北大学EMLPの先生方、また、全国の大学から参加され共に学んだ教職員の方々に感謝の意を表する。

